

令和元年度総合教育会議会議録

日 時 令和元年10月11日（金） 午後3時 開会

場 所 東近江市役所 新館311会議室

出席者

市長	小椋 正清	副市長	南川 喜代和
教育長	藤田 善久	教育長職務代理者	篠原 玲子
教育委員	綾 康典	教育委員	青地 弘子
教育委員	賀川 昌明	教育部長	北村 良子
管理監(学校教育担当)	三輪 光彦	理事(生涯学習・歴史文化振興担当)	田井中弥一郎
次長	大辻 利幸	教育研究所長	國領 順子
秘書課長	中堀 智之	学校教育課学校教育係長	瀧沢 誠
教育総務課長	中西 美智代	学校教育課学校問題対策支援員 事務局(教育総務課長補佐)	小口 広之進 中野 里栄子

以上17名

開会

教育部長

皆さん、こんにちは。  
本日は、令和元年度第2回総合教育会議にお集まりいただきありがとうございます。  
教育部長の北村です。よろしくお願ひします。只今から、会議を始めさせていただきます。  
それでは、はじめに小椋市長が御挨拶を申し上げます。

市長

皆さん、こんにちは。  
今年度第2回目の総合教育会議を開催しましたところ、皆様には御多忙の中、お集まりいただきありがとうございます。また、平素から教育行政の推進に格段の御尽力をいただいておりますことに心から敬意と感謝を申し上げます。

さて、今回は市立小中学校の学力について、「全国学力・学習状況調査結果より」を議題としております。以前からこの「全国学力・学習状況調査」の出来があまり芳しくないといひますか、滋賀県は下位クラスである状況であります。藤田教育長から少し上向しているといひことを聞いておりますので、基礎基本の定着に加え、教員の指導力の問題だけではなく家庭学習のウエイトも大きいと思ひております。私は、以前から中学生以下にはスマホは要らないと常々、申しておりますが、本当に「百害あって一利なし」だと思ひています。

スマホのもたらす弊害を考えないと、情緒の向上のうえでも自分で物を考えて、「こうだろう、ああかな」と考えたり、辞書で調べるこの思考過程で能力がアップすると思ひています。スマホではストレートに答えが出てしまひます。思考能力のプロセスが関係なくなりまひますので、子どもの発達のためには良くないと思ひています。そのことを教育現場から声に出していただきたい。そのようなことをハードルとしながらも、少しでも結果が良くなっています。まして、滋賀県は世帯当たりの〇〇所得が高いのは全国でもトップクラスなので、スマホを子どもに持たせる家庭は裕福なんです。裕福であるがゆえにそれが災いしていると思ひ

市長

います。逆に、秋田、山形、富山、福井、石川県はどうかというと、確かに富山は良いが、TV放送のチャンネル数が極端に少ないのです。いかにこの国がTVメディアという存在に影響を受けているか、それに拍車をかけているのがスマホです。親は管理ができていく状態にあると考えます。自分の部屋でスマホをいじっていたらわからないのですから。それをどうするかというのが学力テストと直接関係ないかもしれませんが、家庭学習での時間を阻害しているのはスマホのようなツールだと思っていますので、そのようなことにも触れていただけるとありがたいと思います。今の時代、真剣に考えていかないとバーチャルリアリティでリセットボタンを押せば、死んだ人間が蘇る、生き返ると勘違いをしている子どもが本当にいるのだと知ったときに、人に対して傷つけたり、あるいは傷つけられたりするこのエスキューズが全く育っていない気がします。近代化、科学の進化がもたらすマイナス面にもう少し我々大人が着目して指摘をしていく必要があるのではないかと、つまり、便利さとかいかにこの国が経済的な進出は構わないが、精神文化や学力文化まで犯されているということ政治家の端くれとしてメッセージをどこかで出していかないといけないと感じております。教育委員会からそのようなことを発信してほしいと思っております。

今日は、学力調査の分析が出てこようかと思っております。どうぞ実のある総合教育会議になればと思っておりますのでどうぞよろしくお願いいたします。

教育部長

ありがとうございました。  
続きまして、藤田教育長がご挨拶を申し上げます。

教育長

皆さん、こんにちは。総合教育会議に御出席をいただきありがとうございます。  
私は、先月末にカナダのテーバー町を訪問し、また、10月初めには市長にも同席いただき明治大学の博物館で開催された展示会のオープニングセレモニーにも出席してまいりました。このことにつきましては、後日の教育委員会定例会にて改めて御報告させていただきたいと思っております。

今日の総合教育会議につきましては、先ほど市長からもお話がありましたように全国学力・学習状況調査の本市での課題ということについて皆様と議論させていただきたいと思っております。

これについては7月に速報値が出た段階で市長には少し改善の兆しがあると報告させていただきましたが、その後分析を重ねる中、あるいはここに来まして校長面談や人事訪問といったことを重ねながらいくつか課題も見えてきておりますのでそうしたことについても議論させていただきたいと思っております。

小学校については基礎学力についての部分でかなり積み上げをしていただいている成果が出て来て改善の兆候も見えてきたと思いますが、中学校については改善というよりはむしろ開きが出ている状況で学校全体の捉え方、意識の持ち方もまだまだかなという思いも私自身は感じております。今後はそのようなことも踏まえて課題の解決に向けて全体が取り組んでいかなければならないと思っております。

またもう一点は、小学校ではかなり学力差のある子どもたちが一つのクラスの中で学んでいるわけであり、そこは習熟度を考慮しながら指導していく必要もあるのではないかと思います。今日はそのような点も踏まえて議論を深めていきたいと思っております。

教育部長

ありがとうございました。本日の出席者はお手元の座席表のとおりでございます。また、お忙しい中オブザーバーとして南川副市長に御出席いただいております。それでは、本日の資料について確認させていただきます。

教育総務課長

(資料確認)

教育部長

なお、会議の議長は会議要綱第4条の規定により市長となりますが、同条の規定により、あらかじめ指名を受けていますので、私が進行を務めさせていただきます。

では、本日の議題であります「東近江市立小中学生の学力」に入らせていただきますが、テスト結果の公表にあたっては公開をしておりませんのでよろしくお願いいたします。

それでは、学校教育課の滝沢係長が説明をいたします。

(学校教育課から説明)

学校教育課

学校教育課の滝沢と申します。よろしくお願いいたします。

学校教育係長

本日の会議では、東近江市立小中学生の学力について説明します。

毎年4月に実施されております全国学力・学習状況調査を基に、本市児童、生徒の学力や学習状況を把握、分析し、各校における児童生徒への教科指導の充実や学習状況等の改善に役立てることを本調査の目的としています。

今年度、調査実施に伴い大きく変更・追加された点について説明いたします。昨年度までの全国学力・学習状況調査は、国語・算数/数学ともに「主に知識に関するA問題」と「主に活用に関するB問題」に分けて実施されていましたが、平成29年3月に公示された新学習指導要領の考え方への理解を促すため今年度からはA、B区分がなくなり「知識」と「活用」を一体的に問う問題形式となりました。そのため、過年度の調査結果からの推移、経年変化等からの分析を一概に行うことはできなくなりました。

また、今年度新たに中学校では、「英語」の調査が追加されました。4領域の内、「聞くこと・読むこと・書くこと」は冊子での問題として出題され、「話すこと」についてはPC端末を活用し音声録音により実施されました。なお、「話すこと」については、各自治体のPC端末の状況に差があり、実施されていない市町・学校もあるため、参考値のみの結果となっています。本市については、校務支援係の協力で、9校全て実施することができました。

こちらのグラフは平成31年度の全国学力・学習状況調査の小学校の正答率を全国・滋賀県・東近江市とを比較したグラフです。国語・算数ともに、全国・滋賀県の平均正答率を下回る結果となりましたが、特に算数では、全国と2.6ポイント、滋賀県と1.0ポイントと、その差を非常に縮めることができました。

また、市立22小学校と全国の平均正答率等を順位化したものがこちらです。平成28年度以降の過去3年間と比較しますと、今年度は国語で9校、算数で10校が全国平均正答率を上回り、過去と比較してもその数を大幅に増加する結果となりました。

次に、各教科ごとの問題別集計結果についてですが、全国と5ポイント差以上を「課題のある項目である」と考えますと、国語では、同音異義の漢字を記述すること、接続語や文末表現に注意し、1文を2文に分けることに課題が見られました。

では、しばらく時間を取りますので、小学校国語の全国との差が大きく、正答率の低かった問題、冊子の6、7ページを御覧いただき、解答するだけでなく、どのように児童が間違ったのかなとも併せて御覧ください。

テスト演習

(2分程度)

学校教育課

解答はこちらです。それほど難しくないと思われるかもしれませんが、子どもたちの答

学校教育係長

学校教育課  
学校教育係長

えを見てみますと、たいしょう(対象) → 「対」は正しく書けていますが、「象」は「照」と書いている解答が多かったです。また、算数で線対称、点対称の勉強をしていることもあって「称」を書いている児童も多かったように聞いています。また、かんしん(関心) → 「感」と回答している児童が多く、これは正答の5倍近くあったということです。また、無回答も多かったようです。

次に算数も、全国と5ポイント差以上を「課題のある項目である」と考えますと、算数では、例年児童にとって課題が見られる「計算の仕方や工夫を筋道を立てて説明すること」や「単位量あたり」に弱さが見られましたが、特に「計算の順序(6+0.5×2)」のような基礎的・基本的なものに正答率の低さが見られました。誤答例としてはこのようなものがありました。先に6+0.5から計算している、また、6+0.5の計算結果を1.1又は11としている児童も多かったという傾向が見られました。

以上のように、小学校においてはある一定の成果を上げていますので、今一度漢字や計算など基礎基本の内容を繰り返し学習し定着を図ることで全国との差を全ての項目で5ポイント以内に収まるようにしていきたいと考えています。

こちらのグラフは中学校の正答率を全国・滋賀県・東近江市とを比較したグラフです。中学校においても過年度との比較や経年変化による考察はできませんが、全教科において、全国・滋賀県の平均正答率を下回る結果となりました。特に中学校では、国語、数学ともに全国より7.8ポイント、滋賀県より5.0ポイント下回る結果となりました。一方、今年度新たに追加された「英語」では、他教科に比べ全国・滋賀県との差はあまり見られませんでした。

次に、各教科ごとの問題別集計結果については、小学校の結果同様、全国と5ポイント差以上を「課題のある項目である」と考えますと、国語では、10問中8問が5ポイント差以上となり、「話す・聞く」「書く」「読む」ことの全てで課題が見られました。特に、「自分の考えを持ち、伝えたい事柄、根拠を明確にして書くこと」に課題が見られました。

また、数学では、16問中13問が5ポイント差以上となり、国語と同よう、全ての領域で課題が見られ、特に、「資料の傾向や目的を的確に捉え、判断理由を数学的な表現を用いて説明すること」に課題が見られました。

では、しばらく時間をとりますので、中学校数学の全国との差が大きく、正答率の低かった問題、冊子の16ページ(8-(2))、20ページ(9-(2))を御覧ください。

テスト演習

(5分程度)

学校教育課  
学校教育係長

回答例としては、「一日当たりの読書時間である26分は山の頂上の位置にないので、一日に26分くらい読書をしている生徒が多いというのは適切ではない」ですが、両問題共に35%が無解答であり、他に比べ非常に高い数値でした。

副市長

この問題で無回答35%というのは、物事が全然わかっていないのではないかと感じます。考えるというよりは見ればわかるものを無回答というのは問題だと思います。

学校教育課  
学校教育係長

今年度新たに実施されました英語では、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」が結果として出ていますが、全体としてまとまりのある英文を聞いたり読んだりして、情報を理解し、自分の考えや思いを表現することに課題が見られました。特に、その場でやり取りできる力「即興性」や聞き取ったことや読み取ったことを元に「話す・書く」など発信につなげていくことが求められていることが伺えました。

では、こちらもしばらく時間をとりますので、中学校英語の全国との差が大きく、正答率の低かった問題です。冊子の13・14ページは「読むこと」、21ページは「書くこと」の問題です。

テスト演習  
答合せ

(5分程度)  
(解答)

学校教育課  
学校教育係長

また、読むことの8(17・18ページ)や書くことの10(25ページ)は本市だけでなく全国でも正答率が低く、正答率が10%以下の問題となっていますので、併せて御覧ください。

以上、中学校の状況を見ていきましたが、各教科において、全国との差5ポイント以内に入る項目は非常に少なく、早急に手立てを打つべき状況にあります。

そこで、4点の取組について紹介します。

まず、各学年の基礎基本となる学習内容を身につけているかを確認するため、補充学習プリント「ガッテンプリント」の積極的な活用を強化していきたいと考えています。昨年度、各校の学級担任・教科担当がすぐに使えるようにと、各教科100枚前後のプリントを印刷・配布し、授業の時間や朝学習、家庭学習での復習プリント等として活用し、何度も繰り返し学習する取組をお願いしています。また、今年度の調査結果から新たに追加された「ガッテンプリント」や英語版「ジェニファーの学校生活」を各校に送付し、積極的な活用を促すため、9月定例校長会議にて周知を行いました。こちらは朝学習や昼のスキルアップの時間の10分間を利用し、「ガッテンプリント」を行っているところです。プリントをさせて終わりではなく、全体で確認したり、ドリル等を活用し修正したりします。また、それに関連する言葉や熟語等も併せて学習しています。さらに、ある小学校では、各教科・学年等に分けてファイリングをして、学習プリントをすぐに取り出し、印刷し、いつでも活用できるように他の学習教材と一緒に設置しています。また、各学校の「ガッテンプリント」の活用率と学力・学習状況調査の結果との相関を分析しましたが、昨年度各校でガッテンプリントを積極的に活用しているオレンジ色で表したところほど高い正答率となり、全国平均正答率を上回る結果となっています。小学校ではまだまだ十分に活用できていなかったり、活用しているがその方法が悪く結果に結びついていなかったりするところもあります。一方、中学校での活用はあまり促進されていないようですので、活用例等を提示し、今一度指導していきたいと考えています。また、今年度の学力調査に関連した新たに追加されたガッテンプリントの内容は、12～1月に実施される県独自の学力調査「学びの基礎チャレンジ」で出題されるようです。その結果から、ガッテンプリントの活用状況や方法、内容の定着度合などを評価・判断する一つの指標となりますので、追って状況を確認したいと考えています。

次に、各小中学校に派遣し、授業参観を基にした学習指導に係るアドバイスや教材研究

学校教育課  
学校教育係長

の協力をいただいている学力向上支援員（アドバイザー）を、より一層中学校での指導、支援に回っていただき、教員の指導力向上を図っていこうと考えています。ここで、昨年度学力向上支援員をされていた元中学校長で現在学校問題対策支援員の小口先生に、実際どのような指導、支援を行ってきたのかを説明していただきます。

学校教育課  
学校問題対策  
支援員

こんにちは、小口です。よろしくお願いします。

写真にもありますように、「学力向上」ということですが、先生方の教師力の向上であるとか授業力の向上が子どもたちの学力向上につながって行くことを念頭に置きながら各学校を回っていました。東近江市は中学校が9校区ありますが、昨年、今年と学力向上支援員6人で分担して、1人が小中学校5～6校を担当しアドバイスに回っていました。私の場合は、五個荘小、中学校区、湖東中学校区、湖東第一、第二、第三小学校区の6校を担当していました。具体的な指導としましては、私が担当していた6校には先生方が約100人位いらっしゃいます。しかし、100人の先生を同時には見られませんので、各校の校長先生とも相談し、97名中38名にターゲットを絞って見ていました。どのような点に注意し見ていたかと言いますと、授業に行く前の「生徒指導力」や児童、生徒の様子を理解する「理解力」、そして、「授業の指導力」という点に注目しながら見ていました。現在は、先生方の「授業の指導力」、「授業の技術力」とも言えますが、そこを先生方にアドバイスしているところです。特に授業の流れはどうだったのか、発問、板書、グループ学習の工夫はどうだったのかというところについて指導しています。特にこの指導の良かった点は、5～6校担当しているので必ず週一回各学校を訪問できることにより、例えば、A先生の授業は先週と今週とを比較してどうだったのかということを経営的に見られて、成長したところ、変わっていないところをアドバイスできたことです。つまり「授業の指導力」、あるいは「授業の技術力」の変化を見ることができて良かったということです。各校を巡回していて最も苦勞したことは、私たちが授業を参観してアドバイスをする時間の確保が難しかった点です。特に小学校の先生は、朝の会から始まって夕方児童を下校させるまでずっと授業が続きますので、どうしても放課後になってようやく「今日はこうでしたよ。」といった話ができるというのが実情です。それに一日ずっと1人の先生だけを見ている訳にもいかず、実際には2～3人の先生を見ているので、放課後に個別に先生にアドバイスするとなると時間の制約もあり、充分なことができませんでした。それでも私たちは、それを補うために、気付いた点をメモやプリント等に残して一人一人の先生にアドバイスすることを心掛けていました。

逆に、中学校は教科担任制ですので空き時間を利用して個別に先生にアドバイスをすることはできるのですが、それでも授業以外の部分で、例えば、生徒指導や空き時間に校内巡視を割り当てられている場合があったりして、結局中学校もアドバイスをする時間の確保に苦勞しました。なので、中学校についても小学校と同様にメモやプリント等を使って一人一人の先生に指導する形を取らざるを得ませんでした。そうした中で、改善が進んだという先生の事例をいくつか説明させていただきます。

まず、これは小学校の先生の事例ですが、私たちはいくつもの小学校を回っていますので同じ教材を使って授業をする場面をよく見かけます。そこで「A学校の先生はこんなプリントを使って授業をしていましたよ。」と、次に行く学校の先生に伝えることができることや、B校の先生に今後の授業の予定を聞いて、「それなら別の学校の先生はその授業をこん

学校教育課  
学校問題対策  
支援員

なプリントを使ってやっていたよ。」といったことを伝えられたりと、その先生が授業のプランを考える上で役立つ情報を多く伝達することができたということです。また、先生から「今日の体育は跳び箱をしますので〇〇を見てください。」というように、授業の見てほしいポイントを事前に伝えてもらって終了後アドバイスをするというのを続けていったことで授業の内容が改善されていったという事例が多く見られるようになりました。また中学校において、どこの中学校でもやっていることではありますがOJT、つまり仕事をしていく中でレベルアップを図ろうということで、例えば、理科の3年目の先生の事例ですが、校内の他の理科の先生たちとグループを作って、常に教材の研究をするとか、理科の先生同士でお互い授業を参観し合っって他の先生の授業内容から学ぶという取組が行われてきました。

中学校は教科担任制であり、私は体育専門（他には英語や数学専門の先生もいる）ですので、細かい所には入っていきませんが、授業規律や生徒指導力など授業を成立させるためのアドバイスをかなりやってきたつもりです。そうした中で私たちが行くことを期待してもらい見に来てほしいという意識の高まりが出てきたことでかなり良いアドバイスもできたのではないかと考えています。

ただ先ほども申しましたように、全員の先生を見ることができなかったこと、特に対象とした先生が10年未満のキャリアの先生が中心となり、50代くらいの先生を見ることができませんでした。その当たりが難しいところかなと考えております。先生方との接し方としては、私は体育会系なのでコーチングスピリットを意識して、対象の先生が改善しようとか挑戦をしようという気持ちを起こしてもらえようような接し方をしてきました。先生方に「ダメですよ。」とか「こうですよ。」などという言い方をすると中にはムツとした表情をされる方もいらっしゃるの考えながらやっていく必要があると思います。ただ、色んな他の学校の情報を先生方に伝えられて、それを実践していただいたという点は成果として考えていいのではないかと考えています。以上のような活動を行なっておりました。

学校教育課  
学校教育係長

ありがとうございました。

月1回アドバイザーとの情報交換会も行ないまして市内の教職員の状況等も把握することができましたので非常に助かっています。これは現在も続けてやっています。さらに、現在、指導主事による「学ぶ力向上」に係る学校訪問を行っていますが、研究会では、授業改善の助言をするとともに学力調査の結果から各校で取り組んでほしいことを伝えていきます。ガッテンプリントの積極的な活用の周知もそれに当たりますが、もう一点、学力調査の教科ごとの結果を正答数で「a」（全問正解を含む正答数が多い績上位の割合）から「d」（全く正答できなかったものを含む成績下位の割合）までの4階層に分類し、子どもたちがどの階層に所属しているかを示したり、所属割合の高い階層を「貴校の重点的に取り組む階層」として各校に提示したりすることで、それに見合った学習内容や授業に取り組んでほしいということを伝えていきます。こちらのデータは、ある小学校とある中学校の実際のデータになります。

最後に、こちらは昨年度作成した学力・学習状況調査についての保護者用の文書ですが、内容を大きく変更したことがあります。それは、今までは児童、生徒質問紙の状況についてのみ記載していましたが、昨年度から「教科ごとの正答率の比較」や「質問紙と学力との相関」を示しました。質問紙に特化したものから学力や学習の状況も併せて記載したも

<p>学校教育課 学校教育係長</p>	<p>のへと変更することで、教育に対する市民の関心と理解を一層深め、学校・家庭・地域が一体となった教育の推進を図れるのではないかと考えています。この資料は、今年度も同様に作成し、学校教育課のホームページにも掲載する予定です。</p> <p>以上で本年度の学力・学習状況調査の結果および取組についての説明を終わりますが、</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>① 基礎基本の学習内容のより一層の徹底・定着を図る</li> <li>② 教科担当だけでなく学校全体として意識改革・改善を図る</li> <li>③ ガッテンプリントの活用促進を図る</li> </ul> <p>に力を入れ、取組を進めているところです。私からは以上です。</p>
<p>教育部長</p>	<p>ただいまの「東近江市立小中学生の学力」に対しまして、御質問はございませんか。</p>
<p>賀川委員</p>	<p>ガッテンプリントの活用率はどういう形で出しているのですか。</p>
<p>学校教育課 学校教育係長</p>	<p>昨年度各校に配布しまして、昨年度末各校にどれくらい活用したかを調査したデータになります。今年度に関しては、新しいガッテンプリントの内容を今年12月、翌年1月に行なわれる県の学力調査に同じような問題が出るよということは県の方が言っていますので、今年に関しては学びのチャレンジのテストを分析すると実際どれくらい取り組んでいるかは見えてくると思います。</p>
<p>賀川委員</p>	<p>例えば、週の内、何時間活用したかとか、それを重ねていくと年間でどれくらいになるのかとかというような数値ではないということですね。</p>
<p>教育研究所長</p>	<p>このプリントは、各教科の単元ごとに教えるべきことを復習を兼ねてまとめているもので、これを実際に各担任が単元ごとにすることによってどれくらい子どもたちが理解できているかということがわかります。また、これを繰り返し活用することによって単元ごとに子どもたちに教えなければならないことがより定着するという狙いがあります。</p>
<p>賀川委員</p>	<p>狙いはわかりますが、数値として活用率の高い学校が学力調査の結果も高いという結論に結びついているとしたら、そのための活用率、言い換えれば教員の技量的なものが出たと仮定するとかなり誤差が生じているように思えましたので質問させていただいた次第です。</p>
<p>教育長</p>	<p>多少はそのようなこともあると考えられますが、今回は相関関係のある程度示すことによって積極的に使ってもらえる材料にしたいと考えております。</p>
<p>賀川委員</p>	<p>そのような意図でしたら理解できました。</p>
<p>教育部長</p>	<p>後ろから3枚目のプリントの「学力・学習状況調査とガッテンプリント活用状況」の表を見ますと相関関係がかなり明らかになってきたということが学校に聞いた結果、出てきていますので、今後もこれを進めていきたいということです。中学校の方の下の方ではA中学校の2年生のオレンジ色の昨年度70%の活用率の学年の子どもが今年3年生になってA中学校だけが何とか全国平均を超えたという関係性になっています。これは効果が表れている</p>



教育部長	と見ることはできないのでしょうか。
管理監(学校教育担当)	<p>ガッテンプリントのそれぞれの学校の活用率はしっかりとしたものは今、出ておりません。しかし、中学校で70%を活用している学校はそれなりの成績が得られていることです。ガッテンプリントを活用することによって、このような問題に慣れるということも大きな成果なのではないかと思えます。単に計算問題を解くというのではなく、問題を読んで考える基本的な思考力、判断力を必要とする問題がガッテンプリントには含まれていますので、これを繰り返すことで力が付いてくるのではないかと思えます。</p>
市長	上位県はこのようなことをやっているのですよね。
管理監(学校教育担当)	<p>はい。上位県はすでにこれを何回もやっています。ガッテンプリントはテストの結果ももちろんですが、何度も繰り返し行うことによって基礎的な学力がつくということが一番大きな狙いです。</p>
市長	<p>逆に言うと、100%活用しているD小学校の学力調査結果はあまり芳しくないわけです。もっと成績の良い学校があることから見ますと、これを100%活用したからといってトップクラスになるわけではないことがいえます。</p>
管理監(学校教育担当)	<p>そのとおりです。必ずしもトップになるわけではありません。あくまでも基礎基本が付くといえます。</p>
教育研究所長	<p>使い方の問題もあります。今日、宿題として使用したということでも、使ったことになるわけで、子どもたちがやってきた答えでどれくらいできているかを見ます。これは教師の指導がどこまでできたか確認できる材料にもなるわけです。</p>
市長	<p>これは最終、教師の意欲と指導力に尽きると思えます。良い教員を集めてくれとずっと滋賀県教育委員会に申し込んでいるわけです。一つの大きな問題は東近江市勤務の希望者は少ないと思っています。通勤不便地のため、ほとんどが天津、湖南エリア、JR沿線の学校を希望されています。</p>
教育部長	<p>せっかくのこのような機会ですので委員さん、今日のこのテストを実際やって見てくださった感想でも、結果を御覧になったの御意見等でも結構ですのでいただけますでしょうか。</p>
篠原委員	<p>学力向上支援員さんの活動報告を聞いて、すごくありがたいなと思いながら報告を聞かせていただきました。結局は先生の力の差というのはありますが、先生も児童の学力は上げなければならぬし、自分のやらなければいけないこともある中で小さな試みを積み重ねていってもらわないといけませんし、お金の問題もお願いしておきたいところです。</p> <p>また学力について、下の子どもたちの学力を引き上げるよりも上の子どもたちを伸ばす方を優先すべきだと以前、講演会での講師がおっしゃっていましたが、それが後回しになっているので上を目指したい子どもたちが上に行けないという現実もあるかと思えます。</p>

篠原委員

わかっている子がわからない子に教えさせるということも大事ですが、もっとできることをやらせてあげる時間も必要かと思います。以前小学校の高学年で算数は少人数の学力別クラスで授業をされていたという事例があったと記憶しています。こういう手法も取り入れてくださるといいのかなと思います。

教育部長

ありがとうございます。綾委員はいかがでしょう。

綾委員

この全国学力診断テストが教職員や子どもたちにとってこの知識を入れておくことが最低限必要であると考えておられることを前提にお話しさせていただきますが、先ほどのガッテンプリントは単純に素人目に見るとあくまでテスト対策だと思えて仕方ありません。このテストの平均点を上げることが目的なのか、子どもたちの総体的な学力を上げることが目的なのか、それをそもそも文科省自体が考えているのかがよくわかりません。このような試験が本当に基礎知識や基礎学力を上げることが目的であればそれはそれでひとつの手法としては良いのですが、全国のレベルに近付ける、上げるのだけが目的であるとすれば少し意識が違うのではないかと感じます。

あともう一点。家庭学習という点を含めて保護者対策にもう少し力を入れてほしいと常々思っています。もっとフィールドワークを取り入れて活性化を図るということも大切かなと思います。来年度から指導要領が変わりますが、もっと郷土を知るといいですか、小さい時にもっと地域のことを知る時間も必要だと思います。ですから、学力向上と並行して地域を知ることも強化してもらいたいと感じました。

教育部長

青地委員はどう思われますか。

青地委員

冒頭の市長のごあいさつのあった内容は、まさにそのとおりだと思います。私も先週、山の中で過ごしましたが、TVが2、3局で何も映らないので仕方なく本を読んだりしておりました。それが毎日の環境なのです。私が懸念しますのは、子どもたちが文字文化に触れていないという点です。この会議でも音声文化なのです。ですからそんな環境で育てている子どもたちは当然文字を読んで理解することができません。普段、生活の中で文字に触れていないものですから、もっと文字文化に触れる機会を増やす必要性を感じます。例えば、授業でも言葉のやりとり、つまり音声だけなんです。もっと文字を読み解く機会、書く機会を増やすことが必要だと思います。もし、学力テストの結果を上げようとするれば、文字文化にもすごく力を入れて取り組ませないと実際力は付かないのではないのでしょうか。まして、資料を読み解いて自分の言葉をまとめて書くというのは困難なことではないのでしょうか。

教育部長

この会議が始まる前に篠原委員がこのごろの子どもたちは「筆圧がない」とおっしゃっておられました。それは何が原因であろうとのことでした。それは今の委員の言われたことと関係するのでしょうか。

青地委員

それも一つ、書くことの機会が少ないことも確かに関係するかもしれませんね。いかに自分の力で読む機会、書く機会を多く設けるかというのが根本的な訓練であると思っています。

教育部長

賀川委員はどう思われますか。

賀川委員

私は学力とは何だろうかというところが根本にあって、現在、日本の文科省あるいは官邸を中心として今後の教育のあり方が示されています。また、大学でも今後世界の中でどんな力が求められるかという観点で、昨年までとは異なる指導法が提唱されてきていますし、入学試験もそれに見合うような制度にするためにあちこちで議論されています。そこで見る力というのは従来のペーパーテストで測ることは非常に難しいものだと思います。今、非認知的能力といったものも課題となってきていますので、そのようなことも踏まえて、今後は学力も含めた人間力をどう身に着けていくかというのが大きな教育課題になっています。その中で今この学力テストは、従来は認知的なものを評価してきた、そこに非認知的要素を組み込もうとする試みのひとつですので、先ほどの回答ができなかったという事例はこれまでの〇×式に慣れてきた子どもたちにとっていきなり文章で説明しろとなりますと非常に難しいのではないかと思います。日本は文字文化が中心でその文字の中でも漢字は高度な認知能力が要求されますから、そのような力を日本国内で情報交換し力を着けていこうとすると最低限身に付けるべき力も必要になるので、それを測る方法も必要だと思います。そういった色々な狙いを持って行なう教育の試みの成果は少なくともどういうやり方をしたらどういう成果が出るかというかなり厳密なエビデンスに基づいてやっていかなければならないと思います。

また、教育効果を上げるためには教師力は重要で、教師の子どもたちへの影響力ということで、教師がどのような行動をすれば子どもたちにどういう影響が出るか、ここについても厳密な研究、分析が必要で、そこから正しい方向性が見えてくると思います。私は今まで授業研究を中心にやってきましたが、そこでベテランの先生が感じていることは概ね80%は正しいですが、時々20%はその先生の思込みと実際の子どもの反応、成果にズレが出ている場合があるという結果が出ています。そこに注目して行く研究、評価が今後ひとつの教育方法として一般化されていくと思いますので、ひとつの啓蒙的な意味で出すものときちんと今後の方針を求めるためのデータとして出すものを分けて考えていく必要があると思います。そのような意味で今回の学力検査は人間の能力を見ているものですから、そこを上げて行くためのガッテンプリントの活用方法としては、昔はガッテンプリントのようにテストの前に全員に同じような問題をやらせるのは当たり前でしたが、今後は果たしてそれだけでいいのかという意識も持ちながらガッテンプリントを活用して能力を上げていくことが必要ではないかなと思います。

教育部長

ありがとうございます。ただいま、委員の皆様から大切な御意見いただいておりますが、言葉という点では非常に大事にしておられるのが副市長だと思っております。御感想等いただけないでしょうか。

副市長

私はテストの問題には、技術的な解き方で解く問題とひらめきで解く問題とがあると子どもの頃から考えていまして、つまり一生懸命繰り返してやっととどりに着く子と問題を見た途端に答えがわかるというセンスを持った子がいると思っています。このガッテンプリントをやることによって先ほどの漢字の「対象」や「関心」のような問題はできると思いますが、先ほどの中学生の「グラフの説明をなささい」というような問題は、30字以内で答えろと

副市長

いう条件も入ってくる場合もあると思いますが、そのような問題はきちんとグラフを見れば答えはすぐわかるはずだと思います。このようなピンと来る感覚を養うことはこのガッテンプリントでは無理な部分だと思います。そういう子どもたちに一度読んだらピンとくるセンス、これは生まれつきのものではないと思いますのでその能力を養わせることが大切なのではないかと感じました。

あと1点、小学校の国語の「そこで」で区切る問題ですが、「そこで」とか「だから」で区切ることについてはこれが小学生に出題されている問題ですが、職員としても正直申しまして困惑するだろうと個人的に思っているところです。基本的に私は理系の人間ですが、理系の人間はセンスで始める分野ではないかと思っていますので、そういうセンスを養う教育、あるいは得意な分野から伸ばしていくという部分についても、皆様には「うちの子はできないチームに入れられている。」という噂が立たないように配慮していただきたいと思います。

教育部長

皆様は、センスは持って生まれたものではなく育てられるものだとお考えでしょうか。

管理監(学校教育担当)

私は自らの持論として、基本的なことがわかっていないとひらめきは起こらないと考えています。何も知らないものからひらめくことはないと思っています。先ほど話の出したノーベル賞受賞者の件も興味、関心のベースがあってこそ本を読んだ時にひらめき起きたのだと思います。そのための基礎知識はきちんと小学校、中学校で教え込む必要があると思いますし、そこから自分の中で興味、関心が芽生えてそれをさらに広げていける人間が育っていけばいいなと思います。

教育研究所長

私も同感で、よく「勘が当たる」などという言葉を使うことがありますが、それは今までの経験から自分の中にベースになるものがあってそれを元に判断してうまくいったというものだと思います。そのために普段から色々な経験や学びが必要であると思います。

先ほどの学力・学習状況調査はこれから求められる人材教育を凝縮したテストでありガッテンプリントはそれを積み上げたものであると思います。来年から新しい進学指導要領が小中学校で始まりますが、全て三つの資質能力を育てるということで、一つは「知識及び技能」基本的な知識をきちんと理解させる、二つ目は「思考力、判断力、表現力」色々な状況にあっても自分はこのように考える、色々な情報がある中で今自分が一番に選択するのはこれだということをきちんと判断していく、そして、自分は何を思っているのかということを中心に表現できる、それは言葉や価値観の異なる人、例えば、外国の方に対しても相手の話しているポイントを自分で判断して自分なりに表現していく力が求められています。三つ目は「学びに向かう力、豊かな人間性」、この三つの資質、能力を求めるとするのが全ての小、中学校あるいは全教科で実施していくこととなります。それに合わせて学力テストも単に知識、理解だけではなくて、例えば普段からいろんな話をして、あるいは人から聞いたことを汲み取って「自分はこんな意見です。」ということをもとめるということがこれから求められる教育を凝縮したテストであるということなので、それで成績が上がったとなれば、このガッテンプリントの効果で成績が上がったということだけではなく、それ以外のこともそれぞれの学校できちんとできているからだということになると思います。このようにこれからの教育がこのように変わってきているということを理解しながら授業に組み込んでいくと

教育研究所長	<p>いうこと重要であると思います。ですからこれはテスト対策だけではなくこれからの教育と いうことを念頭に置いて国が求める人材を作る方向で日々教育していくという意識が大切 だと思っています。</p>
教育部長	<p>時間が限られている中で、本来はもっと御意見を伺いたいところではありますが、今日は 小口先生から私も以前から気になっていた学力向上支援員さんの活動内容を伺うことがで きまして、これまでどのように進めてくださっていたのかがよくわかりました。 では、まとめに入ります。市長には、私どもがやっている現状の方策や今までの分析を聞い ていただいたのですが、もうひとつ、何か御感想をいただけますでしょうか。</p>
市長	<p>この件は教育長に任せていますが、よく頑張ってもらっているとは思っています。 要は大切なのは家庭学習ですよ。そのために家庭学習をする習慣を社会が作っていかないと いけません。そのために学校もどんどん宿題を出すべきだと思います。それと、青地委員が 言われたように、子どもたちはもっと活字を読むべきです。テレビを視ていれば楽なので活 字を読まなくなる。しかしドラマをテレビで視ているより原作を読む方が余程広がりがあり ます。子どもたちが早くそれに気が付いてくれたらきっと楽しく広がる世界を感じてもらえ ると思います。</p>
教育部長	<p>ありがとうございます。最後に教育長よろしく申し上げます。</p>
教育長	<p>私も子どもたちには市長がおっしゃっているようなことを身に付けてもらいたいと思 います。また教師力についても、教師力を高める方法として教師同士が学び合う機会が、東近 江市は小規模の学校が多くなってきた関係もあって取りにくくなっているという現実があ ります。そんな中で学力向上支援員さんに入っていて指導をしてもらっています。そ して、ガッテンプリントについては色んな活用の仕方はあると思いますが、基本的な知識を きちんと身に付けるその確認をする手立てとして活用していこうということです。それで 各担任が、子どもたちがどれくらい知識を身に付けているかを確認し、今後、それをどう授 業に活かしてどう教えていくかを検証する教師の姿勢がなければ児童の成績も伸びない と思います。そのことをじっくり伝えていきたいと思い、取り組んでいきたいと思 います。</p>
市長	<p>先日の神戸の教師いじめのようなことは東近江市ではないでしょうね。一度各校長に調査 をしておいてください。</p>
管理監(学校 教育担当)	<p>ないと思います。次の校長会でそうした話もおきます。</p>
教育部長	<p>以上をもちまして、第2回総合教育会議育委員会を終了させていただきます。 どうもありがとうございました。</p>
会議終了	午後4時45分